

感覺的認識に現れる所の生滅変化する個物は真に存在するものでない。それは仮象に止まる。真に存在するものは唯理性に由って把握せられる普遍恒常のイデアでなければならぬ。個物はイデアを分有する限りに於て存在するといわれるのである。然るにイデアもその普通の度に従って種々の段階を形造る。其最高のイデアが所謂善のイデアと呼ばれるイデア性自体である。イデアをして其含む特殊の部分の調和的なる統一たらしめるイデア性の原理が善のイデアに外ならない。この調和的統一の理性的原理たる、真の美と合一せる善のイデアを根拠として、それに由り普遍恒常の美しき形姿に統一せらるるイデアが真の实在を形造るとしたプラトンの哲学に対して、イデアを個物に内在するものとし（プラトンも個物はイデアを分有する限りに於て存在すると言っている）決してイデアの超越離在でなく、個物のイデア分有というプラトンの思想は、イデアの個物内在と言うアリストテレスの思想と全然異ったものではないと私には考えられる。個は全部を有することは出来ない。無生物から生物、人間皆イデアは有しながらその普遍度は違っている。（更に

古事記

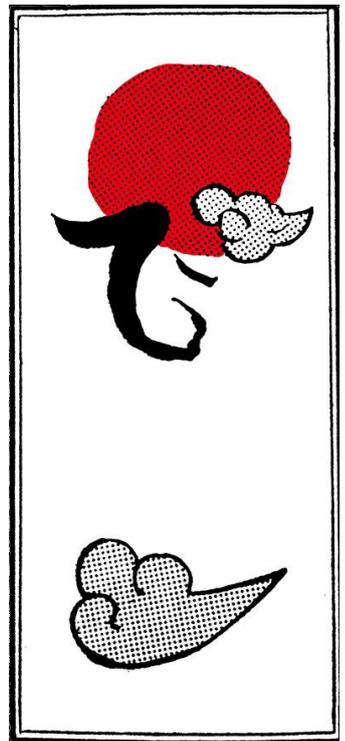
天地の初発のとき

— 实在 — (六)

反省的方法

2 認識批判、カントの先験論

竹葉 秀雄



第 59 号  
 月 | 回 発 行  
 ひの心を継ぐ会  
 〒799-1336  
 住所:愛媛県西条市  
 上市甲 720-1  
 TEL:080-2986-0856

綱 領

- 私達は明德を明らかにします
- 私達は国家の鎮護となります
- 私達は大和世界を建設します

個物が潜勢態から現勢態へ発展する運動に由って本質(アリストテレスは内在的イデアを本質と呼ぶ)を実現するものと考え、且個物がそれに固有の本質を有しなければならぬ所から、本質は第一義的には個体的であると思惟し、運動の原理として他を動かすものは自ら活動する力でなければならぬ。然らば純粹形相は質料混入することなくして如何なる活動をなすか。それは自己自身を思惟する所謂「思惟の思惟」である外は無いとし、これを第一動因と呼び神と称した。凡ての個物が自己自身となる完成した姿に於ける自由活動の世界が神の内容であるとした。

これに対してプロティノスは前述したように、プラトンの超越的統一の原理として善のイデアを維持し、個体のイデアとしてそれに固有なる活動の円現を表わす個々のイデアが一として統一せられるのは、統一の原理としての一者に依ると考えて、善のイデアをかかると解した。プロティノスの一者は超越的であると同時に内在的である。

## 農士道

## 第五章 農士論

## 第三節 農道的自覚

## 菅原 兵治

## 何陋軒記

昔孔子が九夷の地に居らんとした時、人々が「そんな陋(非文化的)な所には居られませんまい」といったのに対して、毅然として「君子之に居る。何の陋かこれあらん」と答えたことがある。

この龍場は昔の夷の地(化外の地)で、蔡(今の河南省に在る)の外にある、ごく偏僻の所である。今でこそようやく中央政府の管轄になったけれども、その風習はまだ往昔(むかし)のままである。人々は私から来るので、「あんな陋な土地には居ることが出来ないだろう」というた。然し私は此処に来てもう十月も居るが、楽しく安らかに暮らして少しも陋などという所ではない。勿論この地の人は鳥言のような話を話し、山羊の皮で拵えた着物を着ている位なのだから、都のような華奢な乗物や美しい衣装や、壮麗な宮殿などの美観、又は飾り立てて儀式ばつた儀礼などの七面倒なものは無い。然しこれは淳樸質素な尊い古の遺風である。思うに昔は今のようによかましい法律や制度が無かったからそうなのであって、之を直ちに今の都と比べて一概に陋なりとすべきものではない。

一 帝都の人間は言行に表裏があつて誠というものが無い。そして金のことになる(と俊(さら)い取つても私腹を肥やすことのみに汲汲としている。一寸見ると善良な紳士のような顔付をしているが、腹の中には棘(とげ)がある。若し彼等のように、宋甬魯掖(最新流行の服装)を着けたり、巧言令色の雄弁を振りまいたりして、それで所謂「文化人」なりとするならば、なるほどこの夷地の人はそんな「文化人」の真似は出来ない。此処の人々は好ければ好いとほめ、悪ければ悪いと罵り、思ったことを飾らずに真直に言う正直な所がある。世間の人は徒らにその言葉遣いや仕度がよくないのを見て、直ちに非文化的だというけれども、私はそうは思わないのである。

私が始めて此処に来た時は、入るべき家が無かったので、ばらやぶの中に堀立小

屋を作っていたが、どうも鬱陶しくていけない。そこで東の峯に遷つて岩穴の中にいたが、今度は陰気でじめじめして困った。然し龍場の人々は、老人も子供もみんな毎日訪ねて来てくれて、余が少しもこの地を陋としないのを見ると、彼等も喜び、従つて私も亦これらの人々と親しむようになった。私がやぶの右の所を開いて圃(はたけ)を作ると、人々は私がこういうことを楽しむのを見て、今度は借(とも)に木を伐つて余の家を建ててくれた。そこで私はこれに檜の皮や竹を以て屋根をつくり、又圃には種々の蔬菜や薬草を播いた。それから階段をつけたり、室のしきりをしたりして、琴や書物を整理し、講誦の準備も大体出来たので、学問したいというものが次第に集つて来るようになって来た。こんな風で丁度都にいた時のように沢山の人が来るようになったので、私も亦自分が今夷の地にいるというようなことは忘れて了つている。因つてこの家に「何陋」と名づけて、孔子の言の伴(いつわ)りでなかつたことを信じている。

中央の都の学問芸術が盛んになったのは代々の聖人がこれを伝えたからであつて、夷の地には之がないから、之を陋というのも一応尤もではある。然るに都に於ては、其後次第に道徳を軽んじて、専ら法律制度のみに走り、官憲は罪人の搜索のみに熱中し、人民は亦狡匿して、何とか詐つては法網を免れることのみを熱中し、淳樸の俗は葉にしたくもない。が、この夷地の民は未だ磨かざる璞(あらたま)であり、けずらざる木であつて、粗硬ではあるけれども、今後の教育によつては、どうにでも立派に薰化して行くことの出来る素質を有しているものであつて、どうして之を一概に陋なりということが出来ようか。これが孔子が九夷に居らんと欲した所以であろう。

さはいえ、夷地の人民に全然学問芸術を教えないわけには行かぬ。現在のままの夷地には迷信が多く、又中正を失して礼に合わないような風習も少なくはない。この点は陋といわれても止むを得ないであろうけれども、こは未だ教育しないためであつて、人間本来の淳樸なる質は、都門の軽薄児のように損ぜられてはいない。若し誠の君子が此処にいて之を薰陶したならば、屹度立派に教化されて行くであろう。然し私は其の人ではないから、これを記して後人を俟つものである。

尤も国家社会は農民のものではない。木にも根もあれば枝葉もあつて、全き生長が出来るように、農工商、各々其の所得、其の分を乱らざる限りに於ては、

何れも必要なものであって、何も農村農民が、自大排他主義——独りよがりの御山の大将——になって得々となるというのではないが、然し自らの本質を自覚し、其の当然の価値と使命とに対する正しき矜持は有たねばならぬと思う。

### 師説研究の楽しさ

三浦夏南

今月から家族での勉強会にて若林強齋先生の論語師説の読解に取り組んでいる。江戸時代の写本なので、文字が鮮明で読みやすい良本ではあるが、我々現代人には読みがたい部分も少なくない。それを家族で協力しながら読解し、現代人にも分かりやすい平仮名交じり文に書き換えて行く作業は、膨大な時間を要するが、極めて楽しい仕事である。

現代に生きる人たちはあまりにも整った知識を与えられ過ぎていて。過去の偉人たちの名著を全集の綺麗な印刷字で容易に読むことが出来るし、難解な言葉には注釈が付いていることも多い。あらゆる古典に訳注本が出ていて、昔の日本人よりも古今東西の良書に親しむ機会が多く与えられている。しかし、我々は与えられ過ぎたことによって、難解な古典を読み解く楽しさを奪われているのではないか、古典を読むことの出来る有難みを感じ取れなくなっているのではないかとも思う。これは古典の読解だけに限ったことではない、農業においてもトラクターや草刈り機、田植え機にコンバインが現れたことで、確かに効率的で便利かもしれないが、土を耕すことの楽しさ、米を刈り取ることの喜びを感じ取り難くなっている。農業の中からこの楽しみが失われてしまえば、後はどれだけ早く仕事を片付けるか、収穫した米がどれだけの利益率で販売できるかのみが農家の関心事になってしまう。これでは天地自然や祖先への感謝が生まれるはずもない。

食事にしても同じである。食べ物育てる、加工品を作るというプロセスが全て省略されて、稼いだお金を払えば、スーパーでも、飲食店でも簡単に食べ物に手に入ってしまう。それは便利ではあるかもしれないが、食べることが出来るということへの喜びや感謝はかえって起こり難くなってしまう。現代の人達があまりにも食に対して関心が薄いのも当然である。

現代人は古事記を読めば日本の神話を知り、日本の国体を知ることが出来る。と簡単に言うが、古事記が読めるようになるためには、江戸時代を通じた国学者たちの努力の積み重ねがあり、その上に本居宣長先生という偉大なる知の巨人の生涯をかけた大努力があつてはじめて読めるようになったのである。今は訳注本が

大量に出て、平仮名混じり文で読むのが当たり前になっているが、全てが漢字で記されている古事記原文を目の当たりにすると、これを読み解くのにはどれだけの努力が必要であったのかが想像されて、呆然たる思いがするはずである。

勿論宣長先生には及ぶべくもないが、我々も未だ書物として刊行されたことのない論語師説を読み解くにあたって、古人が楽しんだ楽しみ、古人が苦しんだ苦しみを経験できることはとても有難いことである。今年一年を通して論語の学而第一だけでも仕上げる事が出来るように家族一致団結して努力して行きたいと思う。

## 小野鶴山墓参記

庄 宏樹

前回までは、小野鶴山の『大学師説』の内容を見てきたのであるが、ここであらためて鶴山の生涯について簡単に触れておきたい。

小野鶴山は、若林強齋の娘、弘室を妻としており、その弘室の墓が現在も東京都新宿区の済松寺境内にあることは、月報「ひ」第五十三号の拙稿において既に述べたとおりであるが、では鶴山自身の墓はといえば、こちらは東京にはなく、福井県小浜市に残されている。これは、彼の主な出仕先は小浜藩の江戸藩邸であったが、亡くなる前年に藩主に従って小浜へ赴き、そのまま同地で没したことによる。山口菅山の「鶴山先生小伝」(近藤啓吾『小野鶴山の研究』所収)によると、鶴山は明和七(一七七〇)年に七十歳で亡くなり、小浜城南の西福寺に葬られたという。

さて筆者は、令和五年の二月十二日から十三日にかけて、小浜市立図書館所蔵の専門学関係資料の閲覧のため、福井県小浜市へと赴いたのであるが、その際に、西福寺にある小野鶴山の墓にもお参りすることができた。東京からの高速バスは福井駅までしか通っておらず、小浜駅まではそこから更に電車で二時間ほどかかる。小浜駅から西福寺までは、歩いて二十分ほどである。

西福寺に到着してまず驚いたのは、その寂れようである。参拝客はもちろん、住職さえ居らず、さらには山門の扁額や、山号が書かれた石碑などが、何も無いような状態であった。これでは、果たしてここが西福寺で正しいのかどうかすら分からない。境内の墓地には、倒れたまま苔で地面とひと連なりになっている墓石もあり、ほとんど管理がなされていないのではないかとさえ思われた。しばらく墓地を探索しているうちに、表に「小野忠市郎之墓」と書かれた墓石を見つけるに至っ



て、はじめてここが西福寺であることを確信し得たのであった。忠市郎とは、小野鶴山の通称である。

西福寺は、大永五(一五二五)年に覚阿弥という僧を開山として建立された時宗の寺院である。境内には、小野鶴山のほかに、小浜藩の藩校である順造館の初代教授を務めた西依墨山(一七二六〜一八〇〇、西依成斎の甥)の墓もあり、かつてはそれなりの規模をもった寺院だったのではないかと思われるが、今はそうした面影もない。

だが幸いなことに、墓石に刻まれた碑文は風化しておらず、現在でも問題なく読める状態であった。同文は『日本道学淵源録』続録増補にも収められているが、参考までにその訓読文を掲げておこう。

翁名は道熙、鶴山と號す。忠市郎は其の通稱なり。豊後日出の人。業を強齋若林先生より受け、遂に平安に居る。後に文學を以て若藩に筮仕す。元禄十四年辛巳月日に生れ、明和七年庚寅六月十四日に終る。享年七十。翁嗣無し。其の季女を以て門人山口重貞に妻はし、因りて其の業を繼がしむ。

文中の山口重貞とは、山口菅山の父である山口風簷(一七四一〜一八〇六)のことを指す。鶴山と弘室との間には一男四女があったが、長男の夭折により、小野家は後嗣を絶やすことになる。藩からは、他姓の養子を迎えて家を嗣がせるよう命じられたこともあったようだが、鶴山はそれを崎門の養子不可論に背くものとして拒絶したという(内田周平『若林強齋先生事歴』三一頁)。この一事だけでも、学問の実践を重んじた崎門の面目を、そこに見出すことができよう。

さて、このたび筆者が小浜にて閲覧した資料は「酒井家文庫」と呼ばれるものである。これは小浜藩の当主である酒井家に代々保存されてきたもので、崎門の講義録を多く所蔵していることで知られる。鶴山が、第七代藩主の酒井忠用によって招聘されたのは、寛保三(一七四三)年のことであって、酒井家文庫の中には、鶴山所講の『近思録講義』『尚書講義』といった資料も収められている。

なお鶴山は、こうした崎門の「師説」と呼ばれる講義録を読むにあたっては、「手

を洗い口を漱ぎ、師に対面しているような心持ちで読むべきである」としており、また「俗流無志之人」には、決して見せてはならない、と述べている(近藤啓吾『若林強齋の研究』四二頁)。「俗流無志之人」とは、思想を単に知識としてだけ受け止め、何の実践も伴わないような人を指すのであろう。筆者はこれからも、引き続き鶴山の『大学師説』を読み進めていくつもりであるが、果たして筆者に本書を紐解く資格があるのかどうかと自問するとき、思わず衿を正さざるを得ないのである。

### とよくも農園だより

三浦 美恵

少しずつ雨とともに暖かい日が増え、春を感じられるようになってきました。とよくも農園周辺でも梅の花が咲き、冬には全く伸びなかった畑の草も、徐々に伸び始めました。

今月は農閑期だったため、丹田呼吸法の実践に力を入れました。里芋を切り離したり、ネギのダンボールづめをしたり、食器洗いをしたりしている時、気が付いたら「フツフツフツ」と三呼一吸をしながら丹田を鍛えています。また毎晩寝る前には家族全員が布団に正座をして、屈折線で体を曲げながら丹田を意識して呼吸をしています。深い呼吸をした後に床につくと、いつも以上にぐっすり眠ることができず。子供達も呼吸法をしながら寝入っている事が何度か有り、深い呼吸と安眠が密接に関係していることが分かります。

冬は気温も湿度も低いいため、雑菌の活動が最も低下している時期です。農閑期に当たるこの時期に昔の人は味噌や醤油を仕込んでいたそうです。調味料を自給すべく、私も米麹からの甘酒・塩糀・味噌、醤油麹からの醤油に挑戦しました。今年は米、麦、大豆全てで自分達で育てたので、そのお米や大豆を蒸して種菌をふりかけ、醸していきましました。調味料の研究をして初めて、ほとんどの調味料は発酵させることによって作られていることを知りました。醤油・味噌・みりん・酒・お酢どれをとっても日本の食卓に欠かせないものですが、それら全てが目に見えない菌の力によって作られていることに驚きました。何度も挑戦し、満足のいく糀ができたので、自家製大豆を蒸して混ぜ、七種類の味噌を仕込みました。甘酒は毎朝手絞り豆乳で割って飲み、仕込んだ醤油は毎朝かき混ぜるのが日課になっています。塩糀で漬けた魚は塩だけで味付けしたもので、りも優しく深い旨味があり、家族お気に入りのメニューになっています。



妹はこの冬、着物の手作りに挑戦し、ついに主人の着物が完成しました。現在主人は毎朝起床すると着物に着替えて丹田呼吸をしたり、勉強をしたりしています。「食」は随分自給ができていますが、少しずつ私達の「衣」服も和に戻していきたいと思っています。

庭では、ついに塩ハウスが完成しました。木の箱は水温が上がるよう内側を墨で塗り、ガラスを組み合わせ、固定してきました。立派なハウスと箱が完成し、いよいよ海水を流し込むところまできました。これで今年からは塩の自給が



できそうです。

その他には、しいたけ栽培にも挑戦しました。知り合いの先輩農家さんにやり方を聞きながら、木にドリルで穴をあけ、植菌していきましました。私達の住む地域では、山に置いておくだけでシイタケを食べられてしまうようなので、鶏小屋の横に置き、番犬チャチャに鶏とシイタケ二つの番をしてもらうことにしました。こちらは一年後から生えるだろうとの事で、今からとても楽しみです。

自給自足は時間がかかります。大豆が育つのも一年がかりです。その大豆から醤油ができるのにさらに一年かかります。何でも買って済ませることができるといつか育って、手作りしていくのは非常な手間と苦労が要ることがわかりますが、その分それが出来た時は大きな喜びになりますし、その過程も家族で楽しむことが出来ます。家族がまとまり、学問に農業に一丸となって励むことが出来ているのはこの上ない幸せです。日々の参拝を欠かさず行い、この幸せを、この伝統を、永遠に繋いでいきたいと切に願っています。



★一燈照偶 万燈照国

ひの心を継ぐ会は竹葉秀雄・近藤美佐子両先生の精神を継承し、発展させることを目的として生まれた会です。一人の「ひ」の精神が周囲の人々の心に「ひ」を燈し、やがてそれが国を照らす「ひ」になることを願い、活動を行っております。皆様には何卒ご理解とご支援を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

★年会費

- 一般会員 三千元
- 賛助会員 一万円
- 特別賛助会員 三万円
- 支援会員 一万円

★振込口座

- 愛媛銀行 普通預金 本町支店
- 口座番号 六一四二七三五
- 『ひの心を継ぐ会』